日本体育大学紀要 35 巻 2 号 (2006) 113–129

[原　著]

近世後期における伊勢参宮の旅のルートと名所見物

—江戸近郊地の庶民の場合—

谷 釜 尋 徳*

(2005 年 10 月 31 日受付，2006 年 1 月 6 日受理)

A Route and Noted Place Sightseeing of a Travel of Pilgrimage to the Ise Shrine in the Latter Term of the Edo Period

—In the Case of the People of Edo Environs—

Hironori TANIGAMA

The purpose of this study pays its attention to a travel of pilgrimage to the Ise Shrine by the people of Edo environs in the latter term of the Edo period, and examine a route between their staying in the locale–Ise and consider the noted place that they visited on the route.

This study offers the following findings:

1. In the latter term of the Edo period, a tendency a route between place of residence–Ise that the people of Edo environs walked detoured around Tokaido on the way, and to pass Akibakaido and Sayaji was strong, and most fixed form became it. According to the record of their travel (=travel diaries), it may be said that noted place sightseeing to be able to put on the route concerned became a fixed form. Therefore, the fixed form of a route between place of residence–Ise that they walked was connected with existence and placement of the noted place that there was on the route.

2. It seems that they were able to know existence of a noted place through such a publication and a travel diary as a traveling record, and the information became one factor to let their noted place sightseeing become a fixed form.

Key words: Travel of pilgrimage to the Ise Shrine, People of Edo environs, Route, Noted place sightseeing, Latter term of the Edo period

キーワード: 伊勢参宮の旅，江戸近郊地の庶民，ルート，名所見物，近世後期

I. 問題の所在

近世の庶民は自己解放の手立てとして数々の娯楽に興じたといわれている。その中でも，自身の居住地域を越境し，非日常の世界（=異文化世界)[1] で遊ぶという特徴を有する「旅」[2] は，近世後期[3] において庶民層に絶大なる支持を受けて大流行したという。

移動手段に乏しい近世においては旅の移動は主として徒歩で行われた。そのため，目的地へとひたすら急ぐような現代的な旅とは異なり，徒歩で時間をかけて移動する当時の旅においては，道中に散在する様々な「異文化」に目を向けることもおろそかにせず，楽しみの一つに加えられた。居住地と目的地との間を点と点で結ぶような現代の旅行とは異な

* 大学院博士後期課程　スポーツ文化・社会科学系

り，当時の旅は目的地[4]に至る道中そのものが娯楽の対象となりえたのである[5]。それゆえに，庶民は目的地を目指して脇目も振らず一直線に歩き続けたわけではなく，途中主要な街道を外れて，道中行く先々の名高い場所を訪れながら旅の歩を進めていった。こうした「名所見物」も，旅の楽しみとして大きな比重を占めていたのである。

「名所」とは現代的な解釈からすれば，景勝の地ないし史跡として有名な場所のことを指す[6]。ところが，近世において刊行された「名所記」[7]や「名所図会」[8]の類をみると，そこで紹介された情報は，社寺に関するものが多くを占めていることに気がつく。近世における「名所」とは，社寺をその範疇に含めて理解されていたのである[9]。

そこで，庶民による旅流行の要因[10]が整いつつあった近世後期においては，道中には旅人に様々な楽しみを提供しうる諸要素が存在していたと思われるが，本研究ではその中でも「名所見物」を取り上げ，とりわけ庶民がどのような名所に立ち寄る傾向にあったのかという点に着目する。

この課題を達成するにあたって，最初に取り上げておかねばならないのは「旅のルート」についてであろう。庶民の名所見物に一定の傾向が見られるが，それは定番化したルート上において営まれた現象であると見なすことができるからである。なお，本研究においてそのルートについて検討するにあたって，あらかじめ対象とする範囲を限定しておきたい。これまでに蒐集しえた旅関連の史料のうち量的に最も多くを占めるのが，江戸近郊地の庶民[11]による伊勢参宮の旅であることから，在地〜伊勢間の往路ルート[12]に対象を限って論ずるものとする。

基本史料として，旅日記・道中記・道中日記などの名称で括られる，旅人自らが道中で認めた日記の類を用いた。それらの名称の中でも，「道中記」は「江戸時代，旅行者のために沿道の宿駅・里程・駄賃・名所・橋梁などを中心として編まれた道中案内の小冊子」[13]という意味合いも含み持つ両義的な概念であることから，本研究では混乱を避けるために旅の記録を「旅日記」と総称することにする。

ここでいう旅日記とは，旅程順に日付，天候，宿泊地，旅籠名，旅籠代，昼食代，間食代，訪れた場所および若干のコメント，賽銭，渡船代，その他購入した物の代金などの諸経費を列記した，いわば金銭出納帳ないし日誌的なものを指す。ゆえに，当該資料は旅の体験や感想・歌などが記述の中心を占め，文学的要素の強い「紀行」ないし「紀行文」と称される史料とは区別されるものである。関東地方の場合には，講組織による代参を利用して旅立つケースが多かったので[14]，報告のために道中における旅費の出納記録を作成する必要が生じたのである。

このように，旅日記はある意味では他人に読まれることを前提として記されたものであったがために，道中での遊興が記録されることは少ない。例えば，伊勢には古市という全国屈指の遊里が存在し，ここで遊んだ旅人も多かったはずであるが，旅日記には当該の記述を記すことはほとんどなかった[15]。そのため，旅日記から道中の娯楽的な要素を抽出する作業は決して容易ではない。しかし，上述したような旅日記の史料的な性格から推してみれば，むしろ立ち寄った場所に関する記述は豊富になされていたので，この史料から旅人が見物した名所を探っていくことは可能である。本研究において名所見物を取り上げた理由はここにも求められている。

また，経済的側面のみならず，旅日記は「個人的な旅の記録というよりも，家族や地域社会に伝えるべき情報を網羅した報告書的な役割を担っていた」[16]と指摘されるように，旅人が見聞した異文化世界の情報を持ち帰り，それを在地の人々へ提供するための記録であったといえよう。ここに，旅日記ないし旅という行為の持つメディア性を垣間見ることも可能である。

ところで，旅日記が個人の書き記した記録である以上，そこに記録者の主観という問題が潜んでいることは否めない。しかし，記録者の主観に基づく記載事項の選択や表現に差異があることもまた事実であり，似通った記述が複数確認できれば，そこにはある程度の客観性が認められると考えることができる[17]。なお，本研究において蒐集した旅日記はすべて男性による旅の記録であるが，それら諸史料の記された年代的な傾向を考慮して，対象とする期間を近世後期に設定している。

本研究に先行する諸研究を眺め返してみると，旅日記を利用した様々な研究が試みられてきたことがわかる。伊勢参宮のルートに関して論じているものとしては次の諸研究がある。山本光正氏は「旅の形

式化」という視点から，東北・関東地方からの伊勢参宮における基本的なルートが定番化していた点を指摘し[18]，桜井邦夫氏は東北地方からの伊勢参宮のルートを類型化している[19]。また，およそ100点に及ぶ膨大な史料の検討により伊勢参宮のルートの類型区分を試み，さらに各ルートの年次的変化にまでも及んで分析した小野寺淳氏の研究も注目に値する[20]。しかしながら，これら諸研究は伊勢参宮の旅における往復のルート全体を大まかに扱ったものであり，旅のルートを部分的に切り取って，当該ルート上に存在する名所との関連性において論じようとする研究ではなかったといわねばなるまい。

一方，旅の名所見物に関する研究は，山本光正氏[21]を中心に，桜井邦夫氏[22]，高橋陽一氏[23]などによって行われてきた。また，原淳一郎氏の江戸庶民を対象とする大山・鎌倉・江の島等の名所への旅に関する一連の取り組みや[24]，同じく江戸庶民による相模国の名所巡りの旅について言及した池上真由美氏の研究[25]も挙げられよう。しかし，そこで対象にされているのは，江戸をはじめとする都市ないしその近郊に位置する名所であり，本研究が取り上げる，江戸近郊地〜伊勢間のルート上において存在した名所について詳細に検討した研究は管見の限り見当たらない。

以上の点を踏まえ，本研究は近世後期における江戸近郊地の庶民による伊勢参宮の旅に着目して，彼らの在地〜伊勢間の往路ルートを検討し，その道中でどのような名所に立ち寄る傾向にあったのかという点について，旅のルートと名所見物との関係性に主眼をおいて考察する。

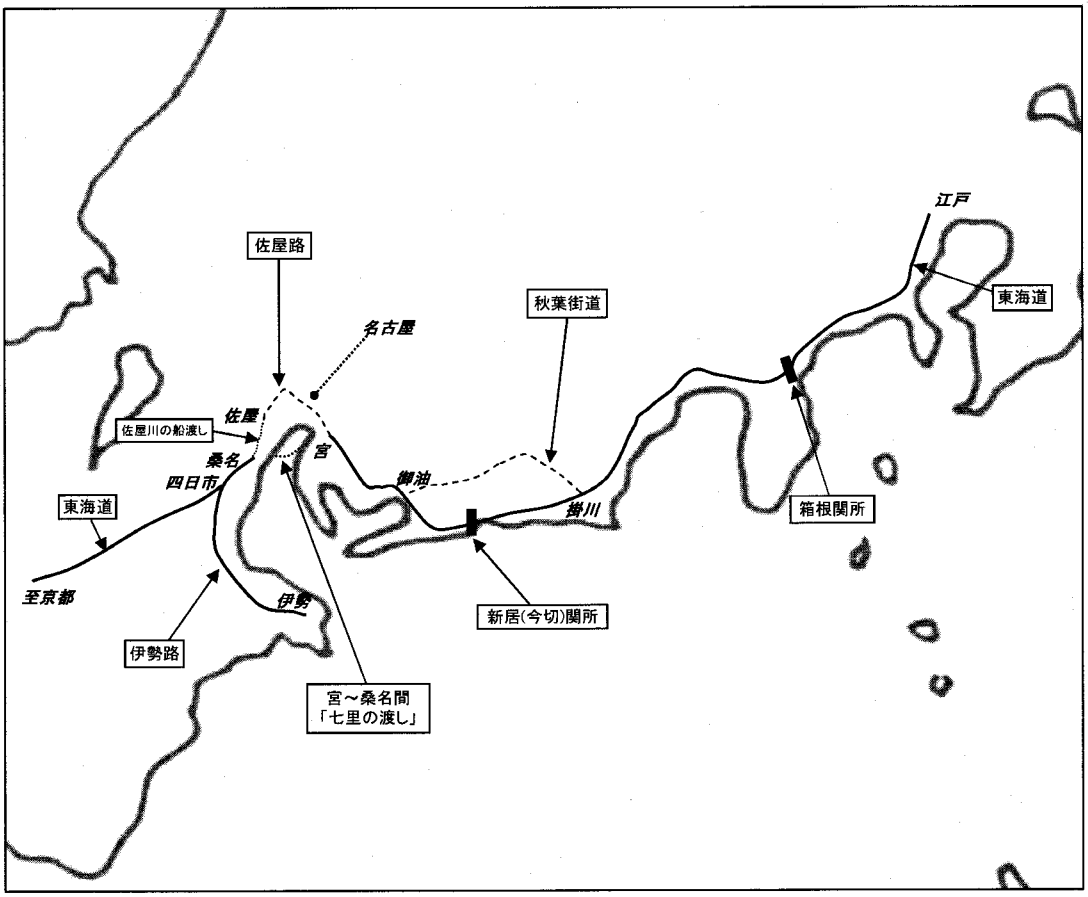

図1　江戸近郊地〜伊勢間のルート

2. 近世後期における旅のルート

2.1 江戸近郊地の庶民による在地～伊勢間のルート

ここでは，江戸近郊地の庶民が伊勢参宮をした際，在地～伊勢間においてたどったルートについて検討する。江戸近郊地から伊勢へ向う場合，主要な旅路となる街道は東海道である。伊勢までの陸路を主とする最短ルートは，在地から東海道沿いに歩き，宮宿から「七里の渡し」を利用して桑名まで渡り，四日市宿付近から伊勢路へ入り一路伊勢を目指すというものである。

ところが，本研究で蒐集した江戸近郊地の庶民による伊勢参宮の諸史料より，在地～伊勢間のルートを探ってみると，大半が途中数カ所，東海道を直進せずに迂回していることに気がつく。そのルートは，おおむね前ページの図1によって示すことができる。図中の点線で表示した街道がここでいう迂回路にあたり，掛川宿付近より入り御油宿で再び東海道へ交わる秋葉街道，宮宿付近より入り佐屋に至る[26]佐屋路がそれに該当する。

一方，表1は近世後期において江戸近郊地の庶民が歩いた在地～伊勢間のルートの傾向を知る目的で作成されたものである。表1では，彼らの秋葉街道および佐屋路の通行について，旅日記の内容から当該の街道を通っていると判断できる場合には「○」，そうでない場合は「×」，ルートが読み取れない場合は「不明」，と表中に記入している。なお，表1で使用している『道中万覚帳』は明治14(1881)年の記録であり，本研究で取り上げる近世後期のものではないが，明治期以降の伊勢参宮のルートを知る意味で表中に組み入れた。

表1によって示される江戸近郊地の庶民による在地～伊勢間のルートをみると，大半の旅において秋葉街道および佐屋路を通行していることが明らかである[28]。したがって，少なくとも近世後期における江戸近郊地の庶民が伊勢参宮をする際には，在地～伊勢間のルートはおおむね定番化していたといえよう。また，明治14(1881)年の『道中万覚帳』においても徒歩で同様のルートが歩かれていることから，この傾向は明治期に入ってもしばらくは伊勢参宮時の定番として踏襲されていたものと思われる。

それでは，ここで得られたルートの傾向は，江戸近郊地の庶民が伊勢へ旅する場合にのみ表れたものだったのであろうか。そこで以下では，江戸近郊地の庶民による旅のルートの比較対象として，近世後期における東北地方の人々による伊勢参宮を引き合いに出し，彼らの歩いたルートについて検討を加えることにしたい。

表1 江戸近郊地～伊勢間における街道の迂回[27]

史料名	年代	通行した街道	
		秋葉街道	佐屋路
道中日記	享和3(1803)	○	○
名所古跡参詣覚帳	文化4(1807)	○	○
道中記	文化5(1809)	○	○
伊勢道中日記扣	文化8(1811)	○	不明
万宿覚帳	文化11(1814)	○	○
道中日記帳	文政12(1829)	×	○
伊勢参宮道中日記	天保元(1830)	○	○
参宮日記帳	天保4(1833)	○	○
伊勢参宮日記	天保6(1835)	○	○
伊勢参宮日記	天保12(1841)	○	○
伊勢参宮帳	天保12(1841)	○	○
伊勢参宮覚	弘化2(1845)	○	○
道中日記帳	安政4(1857)	○	○
伊勢参宮到道中覚帳	文久2(1862)	○	○
道中万覚帳	明治14(1881)	○	○

2.2 東北地方の人々による伊勢参宮時のルート

桜井邦夫氏はその論稿の中で，近世における東北地方の人々による伊勢参宮の旅日記を数点紹介している[29]。そこでここでは，当該の史料を手掛かりとして彼らのたどったルートを探ってみることにしたい。しかしながら，ここでの検討の目的は東北地方の旅人の伊勢参宮時におけるルート全体を把握することではなく，あくまで江戸近郊地の庶民による在地～伊勢間のルートとの比較を試みることにある。そこで，桜井氏が紹介した旅日記の中から，近世後期において東北地方より伊勢へ向かう途中に江戸へ立ち寄っているものを抽出する。したがって，東北地方の旅人が歩いた在地～江戸間及び伊勢到着以降のルートは検討の対象から除外し，江戸付近から伊勢までの間のルートをみていくことにする。こうした観点から，前掲した表1と同様の方法をもって作

表2　東北地方の旅人による江戸～伊勢間の街道の迂回[30]

史料名	年代	居住地	通行した街道	
			秋葉街道	佐屋路
不明	明和6(1769)	飯野川（現・宮城県仙台市）	○	○
伊勢参宮道中記	文政元(1818)	出羽柳沢村（現・山形県西村山郡）	○	○
不明	文政13(1830)	会津利田村（現・福島県耶麻郡）	○	○
不明	天保2(1831)	出羽熊野村（現・山形県西村山郡）	○	○
不明	天保7(1836)	米沢村（現・秋田県仙北郡）	○※	○
伊勢参宮道中日記帳	天保12(1841)	会津大谷村（現・福島県耶麻郡）	○	○
不明	嘉永2(1849)	出羽柳沢村（現・山形県西村山郡）	○	○
伊勢参宮道中記	嘉永3(1850)	南山保上（現・福島県南会津郡）	×	○
道中日記帳	安政3(1856)	関本村（現・福島県南会津郡）	×	○

※天保7(1836)年の史料では秋葉街道を利用してはいるが，秋葉山参詣後は秋葉街道を直進せずに東海道浜松付近に戻っている．

成した，東海道の迂回に関する表2を以下に掲げておきたい。

上記の表2によれば，東北地方の人々の江戸～伊勢間におけるルートも，江戸近郊地の庶民のそれと同様に，概して秋葉街道および佐屋路を通行する傾向にあったといえよう。したがって，先でみた近世後期における江戸近郊地の庶民が歩いた在地～伊勢間のルートの傾向は，当該地域の庶民のみならず，江戸以東の人々が伊勢参宮をする際の定番として，少なくとも近世後期においては定着していたと推すことができるのである。

3.　道中における江戸近郊地の庶民の名所見物

3.1　在地～伊勢間の名所見物

江戸近郊地の庶民が好んだ旅のルート上には，どのような名所が存在していたのであろうか。そこで，ここでは江戸近郊地の庶民が在地～伊勢間のルート上において見物した名所を，彼らの旅日記を手掛かりとして探っていくことにしたい。下記の表3は，本研究において蒐集した旅日記の中から，訪れた場所に関する記述が日記全体を通して比較的詳細に記されているもの12点を取り上げ，それら諸史料より当該の記述を抽出してまとめたものである。ただし，史料10の『道の記』[31] (1852)は彦根藩世田谷領代官家の大場与一による伊勢参宮時の旅日記であり，同史料は庶民によって書き記されたものではないが，道中の名所見物について詳しく記述されていることから，ここで使用することにしている。また，表3は道中における名所の地域的分布を明確に把握すべく，ある程度の地域的なまとまりを考慮したうえで地域区分を設定した。

表3に示される各旅日記に記された名所をみると，どの史料においても旅人は似通った場所に訪れていることがわかる。旅日記が後世の旅人への道しるべとしての性格をも併せ持っているとすれば，同様の地域から伊勢参宮に出発する場合には，先人が書き記した日記を参考にして見物先を選ぶことが可能になる。ところが，表3をみると同様の地域から旅立っている場合に限らず，他地域の庶民による旅においてもほぼ同様の名所を見物している様子が窺える。したがって，先でみた江戸近郊地～伊勢間のルートがほぼ定番化していたように，近世後期に至っては，その道中で見物する名所にも定番のパターンが成立していたとみることができる。このことは，江戸近郊地の庶民の多くが在地～伊勢間の道中において見物する傾向にあった名所を地図上に示した図2を通して確認することができよう。

3.2　江戸近郊地の庶民が見物した在地～伊勢間の名所

ここでは，江戸近郊地の庶民の多くが伊勢までの間に見物した名所（図2参照）が，いかなる特徴を有する場所であったのかを知るべく，旅日記や当時

表3　江戸近郊地の庶民の旅日記に

No.	史料名	史料の年代	著者名	居住地
1	名所古跡参詣覚帳	文化4(1807)	森治左衛門	荏原郡太子堂村 (現・世田谷区)
2	道中記	文化5(1809)	牧野勘四郎	葛飾郡亀戸，または 本所・深川辺り.
3	道中日記帳	文政12(1829)	鈴木佐平次	多摩郡狭間村 (現・八王子市)
4	伊勢参宮道中日記	天保元(1830)	市川弥左衛門	多摩郡南小木曽村 (現・青梅市)
5	参宮日記帳	天保4(1833)	原源次郎	荏原郡下野毛村 (現・川崎市)
6	伊勢参宮日記	天保6(1835)	不明	荏原郡等々力村 (現・世田谷区)
7	伊勢参宮日記	天保12(1841)	田中佐太郎	荏原郡上野毛村 (現・世田谷区)
8	伊勢参宮帳	天保12(1841)	金子四郎右衛門	多摩郡国分寺村 (現・国分寺市)
9	伊勢参宮覚	弘化2(1845)	田中国三郎	多摩郡喜多見村 (現・世田谷区)
10	道の記	嘉永5(1852)	大場与一	彦根藩世田谷領 (現・世田谷区)
11	道中日記帳	安政4(1857)	川口紋三郎	多摩郡上成木村下分 (現・青梅市)
12	伊勢参宮到道中覚帳	文久2(1862)	山崎源右衛門	葛飾郡寺島村 (現・墨田区)

みる在地〜伊勢間の名所見物[32)]

見物した名所					
東海道		秋葉街道	東海道	佐屋路経由	伊勢路
在地〜三島	三島〜掛川	掛川〜御油	御油〜宮	宮〜四日市	日市〜伊勢
・吾妻権現 ・箱根権現 ・三島明神		・秋葉山 ・鳳来寺	・熱田神宮	・津島神社	・白子観世音 ・香の観音
・遊行寺 ・飯泉観世音 ・箱根権現 ・三島明神	・清見寺 ・子育て観音 ・夜泣き石	・秋葉山 ・虚空蔵権現 ・(潮見坂) ※(　)は東海道の当該区間	・在原寺 ・池鯉鮒明神 ・熱田神宮	・名古屋城 ・甚目寺 ・津島神社	・白子観世音 ・一身田観世音 ・津宿の阿弥陀開帳と同所の観音
・箱根権現 ・三島明神	・夜泣き石			・名古屋城 ・甚目寺 ・津島神社	
・箱根権現 ・三島明神	・清見寺 ・久能山 ・府中浅間 ・夜泣き石	・秋葉山 ・鳳来寺	・熱田神宮	・名古屋城 ・甚目寺 ・津島神社	・白子観世音
・吾妻権現 ・箱根権現 ・三島明神	・久能山 ・府中浅間	・秋葉山 ・鳳来寺	・熱田神宮	・甚目寺 ・津島神社	・白子観世音
・遊行寺 ・吾妻権現 ・箱根権現 ・三島明神	・清見寺 ・久能山 ・府中浅間 ・子育て観音 ・夜泣き石	・秋葉山 ・鳳来寺 ・豊川稲荷	・熱田神宮	・甚目寺 ・津島神社	・白子観世音
・吾妻権現 ・箱根権現 ・三島明神	・清見寺 ・龍華寺 ・久能山 ・府中浅間	・秋葉山 ・鳳来寺 ・豊川稲荷	・熱田神宮	・名古屋城 ・甚目寺 ・津島神社	・白子観世音
・箱根権現 ・三島明神	・清見寺 ・三保大明神 ・久能山 ・府中浅間 ・夜泣き石	・秋葉山 ・鳳来寺			
・藤沢小栗堂開帳 ・遊行寺 ・箱根湯元温泉 ・箱根権現 ・三島明神	・清見寺 ・龍華寺 ・久能山 ・府中浅間 ・子育て観音 ・夜泣き石	・秋葉山 ・鳳来寺 ・福田寺 ・豊川稲荷	・熱田神宮	・名古屋城 ・甚目寺 ・津島神社	・白子観世音 ・香の観音
・遊行寺 ・箱根権現	・清見寺 ・久能山 ・府中浅間 ・夜泣き石	・秋葉山 ・鳳来寺 ・豊川稲荷	・鳴海明神 ・笠寺観音 ・熱田神宮	・名古屋城 ・甚目寺 ・津島神社	・白子観世音 ・一身田観世音 ・香良洲神社
・松原明神 ・箱根権現 ・三島明神	・清見寺 ・久能山 ・府中浅間 ・夜泣き石	・秋葉山 ・鳳来寺	・池鯉鮒明神 ・熱田神宮	・名古屋城 ・津島神社	・白子観世音 ・香良洲神社
・川崎大師 ・横浜見物 ・遊行寺 ・箱根湯元温泉 ・箱根権現 ・三島明神	・清見寺 ・妙国寺 ・龍華寺 ・久能山 ・府中浅間 ・子育て観音 ・夜泣き石	・秋葉山 ・鳳来寺 ・砥鹿大明神 ・豊川稲荷	・池鯉鮒明神 ・今川義元の墓 ・熱田神宮	・名古屋城 ・津島神社	・白子観世音

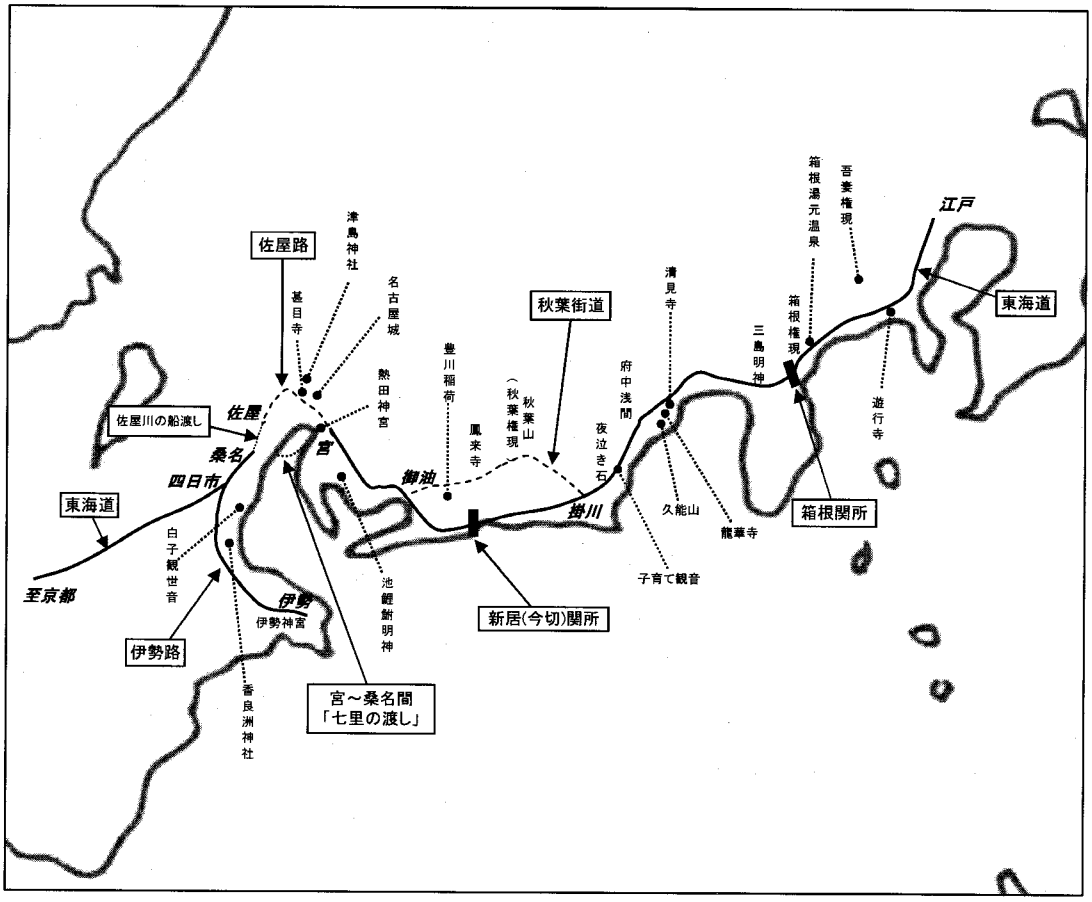

図2　江戸近郊地の庶民が見物した在地～伊勢間の名所

の旅に関する諸刊行物などを手掛かりとして，表3に設けた地域区分に対応させながら順を追ってたどっていくことにしたい。

3.2.1　在地～三島間の名所

在地を出発してから東海道に至ると，まず多くの旅人が訪れた名所は遊行寺である。当寺院は正式名称を藤沢山無量寿院清浄光寺といい，遊行寺という通称は，時宗の祖師一遍遊行上人の名にちなんだもので，ここはその総本山にあたる名刹である[33]。『伊勢参宮到道中覚帳』(1862) には，遊行寺よりも手前で横浜を見物した旨が記されているが[34]，これは，安政6 (1859) 年より開港した横浜が，当時すでに見物の対象となりえていたことを示していよう。

遊行寺の後は，吾妻権現や箱根湯元温泉などに立ち寄る旅人もあった。その先の箱根権現および三島明神は，大抵の旅人が訪れた名所である。とりわけ，箱根権現については，十辺舎一九が『箱根山七温泉江之島鎌倉廻金草鞋』(1833) の中で「箱根権現ハ，(中略) 境内に曽我の祠，祐経をうちたりし微塵丸薄緑の太刀，のちに頼朝公当山へ奉納ありて今にあり。そのほか霊宝物おほし。」[35] と説明している。当地は鎌倉時代より源頼朝をはじめ歴代の将軍や幕府要人の崇敬を受けて発展し，数々の霊宝を備え，多くの旅人が見物するに足る由緒ある名所だったのである。

3.2.2　三島～掛川間の名所

この区間において，多くの旅人が見物した名所は興津宿付近の清見寺である。ここは景勝の地として有名で，『東海道名所記』[36] (1658) に「ひがしのかたをミれば，ふじ，あしたか，ミほの松ばら，田子のうら，のこらずミゆ。まことに，ぶ双の絶景なり。」[37] と，17世紀中頃においてすでに絶賛されている。この名所を訪れた江戸近郊地の庶民も，「清見寺有南の方海中に三保の松原見へけり長さ一

リ」[38]，「清見寺江参詣，三保松原其外景宜敷所也」[39] などとその絶景の印象を書き留めているのである。

清見寺の付近に位置する名所としては，龍華寺・久能山・府中浅間がある。特に，久能山の山頂には東照宮があり，徳川家康を祀る神社として信仰を集めていた。久能山は風光明媚な場所としても知られ，「大海見はらし風景よろしく御座候」[40] と旅日記にも記されている。また，当地では「久能山参詣，麓ニて御本坊へ願案内頼，弐百文遣ス」[41] と旅人に対する案内業も展開されていたとみられる。

その先の道中では，金谷～日坂間にある急勾配の峠，「小夜の中山」にある子育て観音への参詣および夜泣き石についての記述が目立つ。子育て観音のある久延寺は，『東海道名所図会』[42] (1797) に「慶長五年關ヶ原の役の時，山内對馬守一豊，此地に茶亭を營みて，國初将軍家を饗應(もてな)し」[43] と記されている，将軍家ゆかりの名刹である。また，同書に「夜泣石　佐夜中山街道の真中にあり」[44] と記されている如く，小夜の中山には夜泣き石[45] と称される大きな石が転がっていたが，夜泣き石そのものがある種の「名所」として捉えられていた。

3.2.3　掛川～御油間（秋葉街道）の名所

秋葉街道の行程中において最大の名所は，表３中の旅日記のうち大半が見物した旨を記録している秋葉山である。秋葉山は山頂に火之迦具土神（秋葉大権現）を祀り，火防の神として広く信仰を集めた。近世における当地への参詣は，江戸をはじめとする東国地方では広汎かつ相当多量に及んでいたという[46]。秋葉山の隆盛ぶりは，『東海道名所図会』(1797) の「近年都鄙の参詣暑寒を嫌はず，蟻の如く道につどひ，秋葉講とて，國々縣(あがた)々にて，多くの人數を聚め，…」[47] という記述からも知ることができよう。

秋葉山参詣後に多くの旅人が訪れる傾向にあった名所には，鳳来寺をあげることができる。鳳来寺は，古来より聖武天皇・光明皇后に信仰され，中世には源家の祈願所として栄えている。近世に至っては，徳川家康の庇護を受けて家光の代には東照宮が建立されており[48]，『東海道名所図会』(1797) には「参州（三河国の異称―引用者注）に名を得たる第一の名刹なるべし。」[49] と明記されている。当寺院を見物した江戸近郊地の庶民も旅日記に「東照大権現江参詣，御宮結構成造り也，峰之薬師へ参詣，御堂美麗成事也」[50]，「東照大権現御宮結構成，峯薬師江参詣，御堂麗成，其外宮堂拾ヶ所程，外ニ鐘楼堂・三重塔・仁王門何も美麗也」[51] などと記録し，建造物の美しさに感銘を受けた様子が窺える。

その先には，織田信長・豊臣秀吉・徳川家康・今川義元らの武将や大岡越前の帰依を受けたとされる豊川稲荷があり[52]，江戸近郊地の庶民にもこの名所を見物している者は少なくない。

3.2.4　御油～宮間の名所

この区間に存在する江戸近郊地の庶民が見物した主な名所には，池鯉鮒明神・熱田神宮などがある。とりわけ，大抵の旅人が訪れているのが宮宿の熱田神宮である。熱田神宮は三種神器の一つである草薙神剣を祀り，源頼朝をはじめ足利・織田・豊臣・徳川諸氏の崇拝を受けた大社であった[53]。また，熱田神宮の付近には宮と桑名の海上を結ぶ「七里の渡し」の発着場所があり，その船舶の目印として昼夜灯火が消えることのない常夜灯が設置されていた[54]。この常夜灯の数は特筆に値したようで，江戸近郊地の庶民も旅日記の中に「常夜とふ数多有」[55]，「常夜灯数不知」[56] などと記録されている。

3.2.5　宮～四日市間（佐屋路経由）の名所

宮を出立すると多くの旅人は名古屋を訪れ，ここで名所見物を行う傾向にあった。その中でも，多くの旅日記に書き留められているのは名古屋城であるが，『伊勢参宮覚』(1845) より当該の記述を次に引いておきたい。同史料には，「尾州名ごや町甚大きし，西門ぜきへ参りまいの通りを行尾張様御城へ当る，左りの方へついてまハり角の下よりおてんし見ゆる，赤がねがわら両方きんの鯱こ四尺計のたけに見ゆる，実ニぴかぴかとりぱ也」[57] と名古屋城見物の様子が記され，とりわけ金の鯱については，その大きさにまで記述が及んでいる[58]。

つづいて旅人が見物したのは，佐屋路の甚目寺および津島神社である。甚目寺は天智天皇の病気平癒の功により勅願寺となり，その後霊場として栄えた場所である[59]。また，津島神社は「津島牛頭天王」として広く信仰を集め，織田・豊臣・徳川諸氏からも格別の尊崇と庇護を受けたことでも知られる[60]。また，津島神社には江戸近郊地の庶民のみならず，東国の庶民が伊勢参宮時に訪れる傾向が強かったことも指摘されている[61]。

3.2.6 四日市～伊勢間（伊勢路）の名所

四日市追分から入り伊勢に至る伊勢路においては，江戸近郊地の庶民の多くが白子観世音を訪れる傾向にあったようである。当所は子安観音とも称され，子授・安産祈願の名刹として各地に信仰を広めていた。また，境内にある不断桜という桜の木は，四季を通じて葉が絶えず，開花期も春・秋・冬に及んだという。江戸近郊地の庶民も「白子観世音江参詣，境内ニ不断桜名木有」[62]，「白子山江参詣。御堂ノ左ノ方ニ不たん梅と申梅有（桜の間違いであろうか―引用者注）」[63]，「白子のふだん桜これ有」[64] などとこの名木の存在を記録している。そのほかには香良洲神社を訪れる旅人もあった。

4. ルート選択の要因

近世後期における江戸近郊地の庶民による伊勢参宮時のルートが定番化したものであったことはすでに述べたとおりであり，本研究ではそれを秋葉街道および佐屋路の通行を論拠として検討を加えるものであった。そこで以下では，江戸近郊地の庶民が両街道を選択した要因を彼らが見物した名所との関連性において検討することで，ルートが定番化した背景を明らかにすることにしたい。

4.1 秋葉街道選択の要因

東海道の新居宿付近には今切関所が存在していた。そのため，前掲した地図（図1, 2）に示されているように，その手前の掛川宿から入り御油宿で再び東海道に交わるために，今切関所を通らずに旅することができた秋葉街道が，多くの旅人によって選択されたのだとまずは考えることができよう。

しかし，江戸近郊地～伊勢間に存在する関所は，何も今切関所だけではなかった。江戸付近から東海道を利用して伊勢方面に向かう場合，主要なものとしては箱根関所を通過する必要があり，この関所には迂回路は存在しない。そのため，秋葉街道を利用して今切関所を迂回した江戸近郊地の庶民はすでに箱根関所を通過してきたことになり，そのことは本研究において検討した旅日記すべてにおいて明記されている。

ただし，ここで留意しておかねばならないのは，本研究で取り上げている旅のルートや名所見物は，すべて男性によるものだということである。近世における関所は「入り鉄砲に出女」といって，治安維持の観点から江戸への武器の流入と江戸から出て行く女性を取り締まることを主眼としていたために，男性に対する調べは実に簡素であったといわれる。また，関所の通行には名目上関所手形が必要とされたものの，男性の場合は無手形でも通過できることが多く，必要とあらば関所付近の宿屋で手形を都合することもできた[65]。つまり，男性にとって関所は面倒な存在ではあったものの，旅の進行を著しく妨げるものではなかったといわねばならない。したがって，多くの旅人が秋葉街道の通行を選択した理由を，関所の迂回路という点にのみ求めるわけにはいくまい。

彼らの秋葉街道通行の目的が，ひとり関所の迂回によらなかったであろうことは，葛飾郡亀戸（現・江東区）近辺に暮らす庶民による伊勢参宮時の旅日記（『道中記』1809年）に記されたルートからも窺うことができる[66]。この旅では，東海道掛川付近から秋葉街道を選択しているが，秋葉山に参詣した後は秋葉街道を終着の御油まで行かずに浜松辺りで再び東海道へ戻り，今切関所を通過して旅を続けているからである。この場合，秋葉街道を通行した目的は秋葉山を訪れることにあったような気がしてならない。

また，秋葉街道沿いには秋葉山をはじめ鳳来寺や豊川稲荷といった名所も存在していたが，とりわけ，秋葉山からは江戸近郊地の庶民に対して当地への参詣を促す働きかけがなされていたと思われる。江戸近郊の世田谷地域の代官であった大場弥十郎が文化6(1809)年に著した『家例年中行事』に，当時のこの地域に秋葉山から御師[67]が檀廻していたことが記されているからである[68]。参詣者に生計を委ねていた御師がその信仰を宣伝すべく各地を訪れたのだとすれば，世田谷地域のみならずその他の江戸近郊地にも秋葉山の御師が檀廻していたと考えられ，そこに暮らす庶民が伊勢参宮の機会に当地を訪れたのだと推すこともできよう。こうした，名所の存在や名所側からの働きかけも，今切関所の迂回路という性格と相まって，秋葉街道の通行を定着させていった要因として数え入れることができそうである。

しかしながら，東海道の掛川～御油間に全く名所が存在しなかったわけではなく，後掲する諸刊行物に紹介された名所に関する表4に示されているよ

うに，当該区間にも名所と認識された場所は少なくなかった。こうした事情を考慮するならば，当該区間に存在した名所よりも秋葉街道に位置する名所の方が，江戸近郊地の庶民にとっては見物するに足る価値ある名所として捉えられていたといわねばならない。

4.2　佐屋路選択の要因

東海道宮～桑名間には，地図中にも示されているように（図1, 2参照），伊勢湾を船で横断する「七里の渡し」があり，これを利用すれば晴天時には6時間余りで渡航することができたといわれる[69]。しかし，江戸近郊地の庶民の旅日記を通観してみると，先述したように海上を行かずに迂回路である佐屋路を選ぶ旅人が圧倒的多数を占めていることが確認される。これはいかなる理由によるのであろうか。

まず経済的側面，つまり「七里の渡し」の値段に目を向けてみると，『東海道中膝栗毛』(1802) の中では，「此わたし船，七里のかいじやう，一人まへ四十五文ヅヽ」[70] と記され，1人45文で渡っている。この数字の信憑性はともかくとして，近世後期頃の東海道における旅籠の平均的な値段が一泊二食付きで200文程度であったことを考えると[71]，45文という値段はさほど高額ではなかったようにも思える。だとすれば，「七里の渡し」が高額であったがために，これを断念して佐屋路を選択したわけではなさそうである。

ただし，天候の影響によって佐屋路を選択した例は存在する。出羽熊野村（現・山形県西村山郡）より天保2(1831)年に伊勢参宮に出た旅人の日記には，宮宿において「此間桑名江七里渡し有，風はけしければ乗にくふさやいまりてよし」[72] と記されている。この旅人は桑名まで七里の渡しを利用して渡ろうと予定していたものが，強風のため佐屋路の選択を余儀なくされたと推されるのである。事実，七里の渡しは風波の影響による欠航も少なくなかったといわれる[73]。

上記の事例は，東北地方の旅人によるものではあるにしろ，江戸近郊地の庶民の中にもこうした天候の影響によって佐屋路を選択した場合がなかったとは言い難い。それでも，本研究で蒐集した旅日記に限っていえば，江戸近郊地の庶民はおおむね佐屋路を選択する傾向があったことに疑う余地はない。ゆえに，彼らは佐屋路を通行すること自体に何らかの魅力を感じていたと推されるのである。

そこで，佐屋路ないしその付近に位置する名所に目を向けてみると，そこには江戸近郊地の庶民のうち多くが見物した名所として，名古屋城・甚目寺・津島神社などの存在が確認できる。とりわけ，津島神社に関しては秋葉山の場合と同様にして，当地の御師が近世後期に世田谷地域へ檀廻していたことが『家例年中行事』(1809) から確認でき[74]，これも佐屋路選択の一要因として指摘できよう。

冒頭にも述べたように，当時の旅は道中先を急がず，行く先々で非日常の世界（＝異文化世界）を堪能するというものであった。したがって，秋葉街道・佐屋路がその特徴として，より多くの異文化に貪欲に接触しようとする旅人が見物するに足る名所を数多く備えていたことによって，両街道の通行が定着するに至ったといえよう。ともあれ，本研究においては，上述の理由をルートの定番化の一要因として指摘するにとどめておきたい。

5.　刊行物にみる道中の名所

当時世間一般に名所として認識されていた場所には，どのようなものがあったのであろうか。そこで以下において，東海道の名所を紹介しているものとして頻繁に参照される『東海道名所記』(1661) と『東海道名所図会』(1797) とを取り上げ，それらの刊行物の中で紹介されている名所を一覧表にしてまとめ，考察することにしたい（表4）。ただし，江戸近郊地の庶民が見物した名所の大半が社寺であったことから，次に掲げる表では社寺のみを抜き出して整理している。

次ページの表4をみると，先でみたような，庶民が道中で見物した名所の多くは，これら諸刊行物の中で紹介されていることがわかる。したがって，少なくとも彼らが訪れた道中の名所は，当時の世間一般にも「名所」として認識されていた場所であったといえそうである。また，両史料に年代の幅があるにもかかわらず，そこで紹介されている名所（社寺）にさほどの変化はみられないことがわかる。それは，前掲した表3に示される，江戸近郊地の庶民が見物した名所についても同様のことがいえる。無論，各史料の性格の差異を考慮し，より多くの史料を検討する必要はあろうが，少なくとも江戸近郊地～伊勢間において「名所」と位置づけられていた

表4 『東海道名所記』(1661)・『東海道名所図会』(1797)にみる江戸～伊勢間の名所(社寺)一覧[75]

宿名＼史料名	『東海道名所記』(1661)	『東海道名所図会』(1797)
品　川	東海寺／大徳寺／妙国寺	水月観音／海晏寺／東海寺／泉岳寺／三田八幡宮／魚藍観音／西應寺／増上寺／飯倉神明宮／愛宕権現
川　崎		大師河原／新田明神祠／玉川弁天宮／八幡宮／本門寺／鈴森八幡宮
神奈川	熊野権現別当金剛院	
保土ヶ谷		
戸　塚	冨塚八幡宮／親縁寺	
藤　沢	遊行寺／白旗明神	藤沢山無量光院清浄光寺（遊行寺）
平　塚	平塚八幡神社／霊上院高麗寺	八幡宮
大　磯	六社明神社／蔵王神社／吾妻神社／最乗寺	三社権現
小田原		川勾神社／藤巻寺
箱　根	早雲寺／尻食観音／箱根三社権現社	箱根権現／早雲寺／浄泰寺
三　島	三島明神／山王権現社（日枝神社）	三島明神
沼　津		
原	足柄明神	丸子神社
吉　原		
蒲　原	和歌宮大明神	浅間神社
由　比		
興　津	清見寺	豊積神社／清見寺
江　尻	久能山（久能寺）	久能寺
府　中	府中浅間	府中浅間／別雷社／足久保観音／焼津神社／草薙神社／御穂神社
鞠　子		建穂神社
岡　部	青山八幡宮	那閑神社
藤　枝		蓮生寺
島　田		
金　谷		敬満神社
日　坂	久延寺（別称，子育観音．無間の鐘がある）	子育観音／阿波波神社
掛　川	富士浅間神社	己等乃麻知神社
秋葉道		秋葉山権現
袋　井	熊野権現／三ヶ野権現	名星寺／熊野権現祠
見　附	そうしや大明神／府八幡宮／子安大明神／薬師堂／大歳神社	
浜　松	諏訪大明神	諏訪明神社／五社明神社／大安寺／龍禅寺／頭陀寺
舞　坂		鴨江寺
新　居		猪鼻湖神社
白須賀	潮見坂	角避彦神社／紅葉寺
二　川	岩穴の観音	
吉　田		鳳来寺／石巻神社／窟観音
御　油		御津神社／兎足神社／砥鹿神社
赤　坂	法蔵寺	法蔵寺
藤　川		
岡　崎		大樹寺
池鯉鮒	池鯉鮒大明神	池鯉鮒神社／橋雲廃寺／無量寺／狭投神社
鳴　海	天竜の宮／笠覆寺	鳴海寺／鳴海神社／笠覆寺
宮	熱田大明神	熱田大神宮
佐屋路	津島神社／白鳥の明神／上知我麻神社	津島神社／甚目寺
桑　名	松浦の明神	矢田八幡宮／天武天皇社／長圓寺／寿量寺／願證寺／十念寺／光徳寺／泡洲崎八幡宮／桑名神社／本統寺／船崇寺／法皇院大福田寺／佐乃富神社／中臣神社／大圓寺／柳堂法盛寺／最勝寺／不動院／揚柳寺／多度神社
四日市	天照太神の社／日永神社	諏訪神社／建福寺／垂坂観音／志氏神社

場所は，『東海道名所記』が出版された17世紀中頃にはすでにある程度固定していた可能性も指摘できよう。

近世日本においては寺子屋教育が都市のみならず地方各地にもあまねく普及し，その傾向はとりわけ文化・文政期(1804～1818・1818～1830)頃よりいっそう顕著になっていったという[76]。ゆえに，近世後期における江戸近郊地の庶民の多くは，それ相応に読み書きの能力を身に付けていたものと思われる。だとすれば，庶民はこうした刊行物を手にすることで，道中の名所に関する知識をあらかじめ得ることができ，異文化の世界をイメージすることも可能であったといえる。とりわけ19世紀においては，旅の流行に伴い旅行案内書の類が多数刊行されるようになった。オランダ商館の医師として来日していたドイツ人のシーボルトは，『江戸参府紀行』(1826)の中で「日本では道路地図や旅行案内書は必要で欠くことのできない旅行用品の一つである。旅行者は，ヨーロッパで使われるよりももっと多く一般にこういう類を利用する。」[77] と書き残し，当時多くの旅人が旅行案内書を手に道中を歩いていたことを教えているのである。

しかしながら，当時の刊行物は発行部数も少なく値段も高価で，庶民が誰しも容易に手にできるものではなかったという[78]。また，大都市たる江戸に暮らす庶民と比べて，近郊の農村に住居を構える庶民が，刊行物を手にする機会に恵まれていなかったことは否めない。ゆえに，江戸近郊地から旅に出た庶民のすべてが，必ずしもこうした書物から情報を得て名所見物に出かけていたと即断することは避けなければならない。

それよりも，むしろ庶民が道中ないし出発前の準備段階で重宝したのは，同様の地域から旅した先人が書き残した旅日記ではなかったかと思われる。旅日記は名所についての印象をも伝えてくれる可能性を有していたからである。それと併せて，冒頭で述べたような旅日記の特徴およびそのメディア性を考慮するならば，道中の「見聞録」たる旅日記こそ信用するに足る異文化の情報を盛り込んだ貴重な「案内書」であったといえよう。いずれにしても，こうした刊行物や旅日記などといった書物が，名所の存在を広める一つの媒体になっていたことは想像に難くないのである。

6. 結　　び

本研究において検討した結果は，以下のように整理される。

近世後期の江戸近郊地の庶民が徒歩の旅においてたどった在地～伊勢間のルートは，東海道の道筋をそのまま通行するものだけではなかった。むしろ途中東海道を迂回し秋葉街道・佐屋路を通行するケースが多かったといえる。彼らによる旅の記録(＝旅日記)が，当該の脇街道に点在する名所（風光明媚な場所や由緒ある社寺等）への見物を目的としていたことを教えているからである。そのような迂回路を選択させた要因の一つは，御師による社寺側からの宣伝活動に求められる。このようにして，彼らが歩いた在地～伊勢間におけるルートが定番化したのであるが，それは道中における名所の存在と不可分の関係にあったといえる。

また，近世の旅に関する刊行物には，江戸近郊地の庶民が見物する傾向にあった名所の多くが紹介されていた。彼らはこうした刊行物や，道中の見聞録としての旅日記などの「メディア」を通して名所の存在を知ることができた。それがまた彼らの定まった旅のルートを拓いていったと指摘できよう。

注記および引用・参考文献

1) 八隅蘆菴が文化7(1810)年に著した旅行案内書である『旅行用心集』に「皆人他国へ出れば，物いひ，風俗いろいろに替て，己が国言葉に違ふ故に，聞馴，見なれぬ中はおかしと思ふなれど，又先の人も此方をおかしと思ふハ必然なり.」（八隅蘆菴:「旅行用心集」(1810)『旅行用心集』八坂書房，1972, p. 30）と，道中の用心が認められているように，当時においては居住地域より外はまさに「異文化世界」として捉えられていたようである.
2) 「旅」は『日本風俗史事典』に「住んでいる所を一時離れて遠い土地を訪れること」（日本風俗史学会編，弘文堂，1979）とあるが，これは極めて現代的な解釈である．これに加えて，社寺参詣史研究の第一人者である新城常三氏は「生命保持の生産的必要からでもなければ，上からの強制に由るものでなく，多分に自己の自由意思から誘導された消費的な交通を指すもの」（新城常三: 近世民衆の旅「地方史研究」第13巻2・3号，1963. 6, p. 1）として旅を位置づけている．本研究で意図するところの庶民の「旅」は，氏の見解にならうものである.

3) 近世とは一般的に織豊期・江戸時代(1568～1867)を指す．この期間において「後期」とは通常，封建社会の矛盾が顕在化してきた18世紀後半頃から，その矛盾が深刻化した19世紀前半頃までの約1世紀を指すと考えられているが(池上彰彦:「後期江戸下層町人の生活」『江戸町人の研究 第二巻』吉川弘文館，1973, p. 142)，本研究では旅に関する時代区分という特殊性に鑑み，旅そのものの質的変化を近世的な旅の終焉として捉えるという観点から，明治5(1872)年の蒸気機関車の登場までを対象とする期間としたい．無論，旅を規制する関所手形が不要になった時期をもって近世的旅は終焉を迎えたと考えることもできるが，幕末にはすでにそのような規制は実効を失っていたといわねばならない．

4) 近世の庶民が旅に出るためには，原則として関所の通行を願い出る関所手形および身許を保証する往来手形の携行が必要とされた．関所手形や往来手形には旅の行先や目的が記されており，庶民が娯楽として旅に出る場合には，その行先や目的は各地の神社・仏閣としておくのが慣例であった．しかしながら，それは御利益に定評のある社寺への参拝を旅の目的としておけば，手形を発行する領主側も特に咎めることもなかったからであり，そこに記された社寺は目的ならぬ「目的地」にほかならなかった．つまり，ここでいう目的地とは，庶民が名目上設定したものなのである．

5) 新城常三氏は，現代の旅を「目的地への直行であって，途中は素通りであるから，経過地での体験は乏しい．」(新城常三:『庶民と旅の歴史』日本放送出版協会，1971, p. 123)と捉え，「今日の旅は，出発地と目的地とをストレートに結ぶ点と点との旅であるが，昔の旅は線の旅であり，さらには，面の旅ですらあった．」(同上書，p. 124)との見解を示している．

6) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編:『日本国語大辞典 第十二巻(第二版)』小学館，2001, pp. 1084-1085.

7) 名所記は，「名所を書き記したもの．名所案内，特に江戸初期に多数刊行された諸国の名所案内や地誌的な内容をもつ作品群．」(同上書，p. 1086)と説明されている．

8) 名所図会は，「江戸後期の地誌風の読み物の総称．各地の名所旧跡の沿革などを解説し，これに風景画を添える．」(同上書，p. 1086)といわれるものを指す．

9) 新城常三氏は近世における社寺への参詣について次のように指摘している．「観光といっても，社寺自体が最大の文化財であり，最高の観光資源であるから，この意味で参詣は，本来，観光・遊楽的要素を含んでいたともいえる．(中略)参詣の遊楽化・観光化を近世参詣の時代的特色として打ち出すこともまた許されるであろう．」(新城常三:『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』 塙書房，1982, p. 735)そこで本研究においては，新城氏の指摘に倣い，社寺への参詣(＝名所見物)も旅の楽しみとして行なわれた行為であったと捉えておくものとする．

10) 新城常三氏は庶民層による旅が近世において急速に発展した理由を主に次の点に求めている:「(一)幕府，各藩が積極的に農業振興策を推し進め，農業技術が発展し，生産力が高まり，農民並に商人が著しく成長して富裕となり，農村・都市を問わず消費経済が向上したこと．(二)封建制度の完成により，民衆は厳しくなった藩の規制から遁れて，自由な世界への巡歴を求めたこと．(三)さらに交通環境が改善されて，中世の苦しい旅が享楽的な旅に変質したこと．」(新城常三:『庶民と旅の歴史』日本放送出版協会，1971, p. 48).
本研究では，このほかにも庶民が経済的ゆとりに伴い獲得した余暇の中で，全国的に展開した寺子屋教育などによって識字率を向上させていた点にも注目している．これによって，旅に関する書物を読み，その旅の情報に触発されて，実際に旅に出かけ，さらにその際に記録を書き記すことが可能になったと推されるからである．

11) 「江戸近郊地」という地域的概念は，江戸を除く武蔵国一帯をいうこともあれば，相州(現・神奈川県辺り)までも含むこともあり曖昧にされてきた．そこで，本研究では江戸の都市文化をとりわけ積極的に受容したと考えられる，江戸に隣接した葛飾・足立・豊島・多摩・荏原の五郡を便宜的に江戸近郊地と規定しておくものである．なお，江戸近郊地に暮らす庶民の多くが農業を営む農民であったのであるが，その「庶民」は「貴族などにたいして普通の人々」「支配階層にたいしては支配される被支配者層」「大部分は生産者」などと定義づけされるのが一般的であるといえる(桜井庄太郎:「庶民」『社会科学事典』鹿島研究所出版会，1971, p. 365).

12) 当時の旅は，より多くの異文化に触れるべく目的地に対する往復路で異なる旅程を選択することが一般的であった．そのため，江戸近郊地の庶民による伊勢参宮の旅でも，目的地たる伊勢を出立した後，帰路は東海道を利用せずに中仙道経由で帰着するものが多い．ま

た，本研究で蒐集した旅日記の特徴として，伊勢に参詣した後は記述が雑になる傾向がみられる．したがって，本研究では在地～伊勢間の「往路」ルートを対象とする．

13) 日本風俗史学会編：『日本風俗史事典』弘文堂，1979, p. 453.

14) 小野寺　淳：道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷―関東地方からの場合―「筑波大学人文地理学研究」第14号，筑波大学地球科学系，1990. 3, p. 232.
江戸近郊地の庶民は，旅費を捻出するために，地域や職業を単位に「代参講」と呼ばれる組織を結成した．これは，講員で積み立てた金を経費とし，毎年くじ引きなどで数人の代参者を選抜して，信仰対象である神社仏閣に参詣させる形式をとった講のことを指す（宮田　登：「代参講」『日本交通史辞典』吉川弘文館，2003, p. 524）．

15) 西垣晴次：『お伊勢まいり』岩波書店，1983, p. 173.

16) 田中智彦：道中日記にみる畿内・近国からの社寺参詣「交通史研究」第49号，交通史研究会，2002. 3, p. 20.

17) 原　淳一郎：近世参詣地名所における参詣者意識―江戸十里以上の江の島参詣―「交通史研究」第51号，交通史研究会，2000. 11, p. 24.

18) 山本光正：旅日記にみる近世の旅について「交通史研究」第13号，交通史研究会，1985. 4, pp. 69-84

19) 桜井邦夫：近世における東北地方からの旅「駒沢史学」第34号，駒沢大学史学会，1986. 1, pp. 144-181.

20) 小野寺　淳：道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷―関東地方からの場合―「筑波大学人文地理学研究」第14号，筑波大学地球科学系，1990. 3, pp. 231-255.

21) 山本光正：旅日記にみる近世の旅について「交通史研究」第13号，交通史研究会，1985. 4, pp. 69-84／諸国人にとっての江戸―社寺参詣者を中心として―「国立歴史民俗博物館研究報告」第14集，国立歴史民俗博物館，1987. 3, pp. 335-355／『江戸見物と東京観光』臨川書店，2005, 220 p.

22) 桜井邦夫：近世における東北地方からの旅「駒沢史学」第34号，駒沢大学史学会，1986. 1, pp. 144-181.

23) 高橋陽一：多様化する近世の旅―道中記にみる東北人の上方旅行―「歴史」第97輯，東北史学会，2001. 9, pp. 105-133.

24) 原　淳一郎：江戸庶民の社寺参詣―相模国大山参詣を中心として―，「地方史研究」第49巻4号，地方史研究協議会，1999. 8, pp. 58-78／近世期名所のセット化と富士・大山参詣，日本歴史学会編「日本歴史」第637号，吉川弘文館，2001. 6, pp. 34-50／近世参詣地名所における参詣者意識―江戸十里以上の江の島参詣―「交通史研究」第61号，交通史研究会，2002, pp. 23-44／大山参詣に見る近世の旅―旅日記の分析を通じて―「郷土神奈川」42号，神奈川県立図書館，2004. 3, pp. 1-21.

25) 池上真由美：『江戸庶民の信仰と行楽』同成社，2002, 212 p.

26) 佐屋からは，佐屋川を船で3里（約11.7 km）下ると桑名宿で東海道に再び合流する．

27) 表1は以下の諸文献を基に作成したものである．
小林儀兵衛：「道中日記」(1803)『谷合氏見聞録』青梅市文化財保護委員会，1974, pp. 84-86／森　治左衛門：「名所古跡参詣覚帳」(1807)『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会，1984, pp. 177-178／牧野勘四郎：「道中記」(1809)『江東区資料　牧野家文書二』江東区教育委員会生涯学習課，1995, pp. 18-27／冨田佐兵衛：「伊勢道中日記扣」(1811)『北区史資料編　近世2』北区，1995, pp. 138-140／「万宿覚帳」(1814)『多摩市史資料編二　近世　文化・寺社』多摩市，1996, pp. 230-231／鈴木佐平次：「道中日記帳」(1829)『江戸時代の庶民の旅　鈴木佐平次道中日記』古文書を探る会，1981, pp. 7-16／市川弥左衛門：「伊勢参宮道中日記」(1830) 前掲『谷合氏見聞録』pp. 91-95／原　源次郎：「参宮日記帳」(1833) 前掲『伊勢道中記史料』pp. 130-134／「伊勢参宮日記」(1835) 前掲『伊勢道中記史料』pp. 152-158／田中佐太郎：「伊勢参宮日記」(1841) 前掲『伊勢道中記史料』pp. 99-105／金子四郎右衛門：「伊勢参宮帳」(1841)『国分寺市史料集（Ⅲ）寺社・信仰・文芸関係文書』国分寺市，1983, pp. 297-298／田中国三郎：「伊勢参宮覚」(1845) 前掲『伊勢道中記史料』pp. 1-8／川口紋三郎：「道中日記帳」(1857) 前掲『谷合氏見聞録』pp. 69-71／山崎源右衛門：「伊勢参宮到道中覚帳」(1862)『墨田区古文書集成（Ⅲ）松本家文書』墨田区教育委員会社会教育課，1989, pp. 6-9／小泉角兵衛：「道中万覚帳」(1881) 前掲『伊勢道中記史料』pp. 74-77.

28) ただし，『道中記』(1809) では掛川宿より秋葉街道に入っていることが確認できたために表中に「○」を記入したが，この旅では秋葉山参詣後に秋葉街道を進まずに東海道浜松宿付近へと下っている．

29) 桜井邦夫：近世における東北地方からの旅「駒沢史学」第34号，駒沢大学史学会，1986，pp. 144-181.
30) 表2は以下の諸文献を基に作成したものである．
「表題不明」(1769)『河北町誌 上巻』河北町，1975, pp. 653-656／「伊勢参宮道中記」(1818)『西川町史編集資料　第十一号』西川町教育委員会，1980, pp. 48-53／「表題不明」(1830)『会津高郷村史』福島県耶麻郡高郷村，1981，pp. 345-355／「表題不明」(1831) 前掲『西川町史編集資料　第十一号』pp. 63-68／「表題不明」(1836)『中仙町郷土史資料　第三集』秋田県仙北郡中仙町郷土史編さん委員会, 1974，pp. 273-279／「伊勢参宮道中日記帳」(1841) 前掲『会津高郷村史』pp. 345-355／「表題不明」(1849) 前掲『西川町史編集資料　第十一号』pp. 86-90／「伊勢参宮道中記」(1850)『日本庶民生活史料集成　第二十巻』三一書房, 1972, pp. 501-504／渡辺吉蔵：「道中日記帳」(1856)『田島町史　第4巻 民俗編』福島県南会津郡田島町，1977, pp. 881-889.
31) 大場与一：「道の記」(1852) 前掲『伊勢道中記史料』pp. 205-213.
32) 表3の作成にあたって使用した史料の出典については，表1の出典を示した「注27)」を参照されたい．
33) 金岡秀友編：『古事名刹辞典』東京堂出版，1970，p. 342.
34) 山崎源右衛門：「伊勢参宮到道中覚帳」(1862) 前掲『墨田区古文書集成（Ⅲ）松本家文書』p. 6.
35) 十辺舎一九：「箱根山七温泉江之島鎌倉廻金草鞋」(1833)『十辺舎一九の箱根江の島鎌倉道中記』千秋社，1982，p. 18.
36)『東海道名所記』は万治元(1658)年に浅井了意によって著された．これは楽阿弥陀仏という僧が，江戸で知り合った大坂商人と一緒に東海道を旅するものである．東海道の名所旧跡を訪ね，土地の歴史や風俗が二人によって紹介されている．
37) 浅井了意：「東海道名所記」(1658)『東海道名所記 1』平凡社東洋文庫，1979，p. 176.
38) 市川弥左衛門：「伊勢参宮道中日記」(1830) 前掲『谷合氏見聞録』p. 92.
39) 田中佐太郎：「伊勢参宮日記」(1841) 前掲『伊勢道中記史料』p. 100.
40) 山崎源右衛門：「伊勢参宮到道中覚帳」(1862) 前掲『墨田区古文書集成（Ⅲ）松本家文書』p. 7
41)「伊勢参宮日記」(1835) 前掲『伊勢道中記史料』p. 154.
42)『東海道名所図会』は，東海道を扱った絵入りの名所案内書である．寛政9(1797)年に秋里籬島によって著された．内容は名所旧跡の説明，宿場の現況や歴史的事実を述べ，伝説を説き，関連の古歌を紹介し，各地の産業名産にまで言及している．
43) 秋里籬島：「東海道名所図会」(1797)『東海道名所圖會』大日本名所圖會刊行會，1920，p. 520
44) 同上書，p. 515.
45) 東海道日坂宿に嫁入りした女性が，あるとき里帰りの途中小夜の中山で盗賊に殺害された．女性は臨月だったが，近くの久延寺の僧がこれをみつけ，腹を切って子どもをとりあげ助け，その子を育てた．母親の霊が小夜の中山に転がる石にこもり毎晩泣き声が聞こえたことから，この石は「夜泣き石」と呼ばれたという(今井金吾：『図説 東海道五十三次』河出書房新社，2000，p. 63).
46) 新城常三：『新稿　社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房，1982，p. 969.
47) 秋里籬島：「東海道名所図会」(1797) 前掲『東海道名所圖會』p. 499.
48) 金岡秀友編：『古事名刹辞典』東京堂出版，1970，p. 300.
49) 秋里籬島：「東海道名所図会」(1797) 前掲『東海道名所圖會』p. 419.
50)「伊勢参宮日記」(1835) 前掲『伊勢道中記史料』p. 156.
51) 田中佐太郎：「伊勢参宮日記」(1841) 前掲『伊勢道中記史料』p. 102.
52) 金岡秀友編：『古事名刹辞典』東京堂出版，1970，p. 262.
53) 薗田　稔・橋本政宣編：『神道史大辞典』吉川弘文館，2004，p. 20.
54) 児玉幸多：『宿場と街道』東京美術，1986，p. 79.
55) 田中国三郎：「伊勢参宮覚」前掲『伊勢道中記史料』p. 6.
56) 田中佐太郎：「伊勢参宮日記」(1841) 前掲『伊勢道中記史料』p. 104.
57) 田中国三郎：「伊勢参宮覚」(1845) 前掲『伊勢道中記史料』p. 6.
58) 1尺は約30.3 cmであるので，著者が予想した「四尺計のたけ」とは1 m 20 cm（約121.1 cm）ほどであったことになる．
59) 日本史広辞典編集委員会編：『日本史広辞典』山川出版社，1997，p. 1027.
60) 白井永二・土岐昌訓編：『神社辞典』東京堂出版，1979, pp. 230-231.
61) 新城常三：『新稿　社寺参詣の社会経済史的

研究』塙書房，1982，p. 969.

62) 「伊勢参宮日記」(1835) 前掲『伊勢道中記史料』p. 157.

63) 鈴木佐平次:「道中日記帳」(1829) 前掲『江戸時代の庶民の旅　鈴木佐平次道中日記 p. 71.

64) 山崎源右衛門:「伊勢参宮到道中覚帳」(1862) 前掲『墨田区古文書集成（Ⅲ）松本家文書』p. 8.

65) 例えば，勝海舟の父親の勝小吉は，文化 12 (1815) 年に東海道小田原宿において 200 文を支払って旅籠で手形を都合してもらっている（勝　小吉:「夢酔独言」(1843)『夢酔独言他』平凡社東洋文庫，1969，p. 23).

66) 牧野勘四郎:「道中記」(1809) 前掲『江東区資料　牧野家文書二』pp. 18–27.

67) 御師 (おし) とは，社寺に所属して信者の祈祷を代行し，参詣の便宜などを図る宗教者のことである（池上真由美:『江戸庶民の信仰と行楽』同成社，2002，p. 52). 伊勢の御師を例にみると，彼らはそれぞれの担当地域（檀那場）を訪れ，神宮の御札などの土産物を配って，伊勢参宮への勧誘を行っている.

68) 大場弥十郎:「家例年中行事」(1809)『世田谷区史料　第一集』世田谷区，1958, pp. 254–255.

69) 近藤恒次:「桑名七里の渡」『日本交通史辞典』吉川弘文館，2003，p. 320

70) 十辺舎一九:「東海道中膝栗毛」(1802)『東海道中膝栗毛（上)』岩波書店，1973, p. 315.

71) 『伊勢参宮覚』(1845) に記された東海道各宿における旅籠の宿泊代をみると，一泊 200 文程度の旅籠が多くを占めている（田中国三郎:「伊勢参宮覚」(1845) 前掲『伊勢道中記史料』pp. 1–41).

72) 「表題不明」(1831) 前掲『西川町史編集資料第十一号』p. 67.

73) 楠戸義昭:『探訪日本の歴史街道』三修社，2003，p. 66.

74) 大場弥十郎:「家例年中行事」(1809) 前掲『世田谷区史料　第一集』pp. 254–255.

75) 浅井了意:「東海道名所記」(1661)『東海道名所記 1・2』平凡社東洋文庫，1979／秋里籬島:「東海道名所図会」(1797) 前掲『東海道名所圖會』より作成.

76) 文部省編:『日本教育史資料八・九』文部省，1892.

77) シーボルト:「江戸参府紀行」(1826) 斎藤信訳『江戸参府紀行』平凡社東洋文庫，1967，p. 22.

78) 竹内　誠:「庶民文化の中の江戸」『日本の近世第 14 巻　文化の大衆化』中央公論社，1993, pp. 11–12.
江戸や大坂をはじめとする大都市においては「貸本屋」の存在が確かめられ安価で書物を貸し出していたことが確認されるが，その文化が江戸近郊地の庶民にまで浸透していたかどうかは定かではない.